ねこだけ通信

南郷谷リハビリテーションクリニック便り　令和６年　8月発行　第18号

後医は名医」？

先に診察した医師よりも後から診察した医師の方が診断や治療を行いやすく、同じ患者を診るなら後から診た方が名医になれるという言葉である。医者の仲間内でよく言われる「諺」みたいなものだ。**前医の「誤診」を慰める(？)ときにも使われる。**

例えば「虫垂炎」(いわゆる盲腸)の患者さん。最初は「何となく鳩尾のあたりが張って気持ち悪い」という訴えで来院されることが多い。初めから盲腸を痛がれば診断は容易なのだが、痛みの場所は鳩尾だと言われる。とりあえず胃薬を飲んでもらう。

時間の経過とともに痛みの場所が右下腹部へ移動し、吐き気が出てくる。後日家族から「夜中に病院に連れて行ったら「盲腸」と言われて緊急手術になりました」と言われることになる。

こういう事態を避けるには、「虫垂炎の初期症状は心窩部痛」である事を常に念頭に置く必要がある。患者さんと家族には虫垂炎の可能性を伝え、「もし痛みが強くなったり吐き気が出てきたら救急病院を受診するように」と伝えておく。

「帯状疱疹」の場合もしかり。帯状疱疹は小児期に罹った水疱瘡ウイルスが再び暴れだして発症する。片方の肋間神経に沿った部位に「ピリピリ」「ひりひり」と表現される痛みがあり、水泡を伴う発疹が連なって現れる。皮膚科医でなくとも、診断は比較的容易である。

しかし患者さんの中には、皮膚には何も異常がなく「ひりひり感」だけで受診されることがある。この場合も「帯状疱疹の発症前の前駆症状」ではないかと疑う必要がある。「ビタミン剤と鎮痛剤で経過観察しますが、毎日痛みの場所を鏡で観察してください。もし発疹が出たらすぐに来てください」と説明しておく必要がある。

帯状疱疹は初期対応が重要で、発症72時間以内に抗ウイルス薬の投与を開始しないと所謂「帯状疱疹後神経痛」という厄介な後遺症が残ることが多い。

「後医」(総合病院の若手医師の場合が多い)は「前医」に比べて恵まれた条件で診療を行う。あらゆる画像検査、血液検査を緊急でオーダーでき、判断に迷ったら横にいる上級医に相談もできる。

昔は誤った「万能感」を抱いて、前医に対する敬意を欠く言葉を発する医師がいたそうだ。これからはより緊密な「病診連携」を心がけて、患者さんの利益を最大化していきたい。

ウガンダを目指して　その一

「パパ、ママ、ウガンダに遊びに来てください」ヴィアリーからLINEが入った。

彼は10年前、ウガンダから「あしなが育英会」の支援を受けて明治大学に留学するために日本にやってきた。私たち家族とは「ユニセフ・アフリカこどもの日イン熊本」で知り合った。

以来彼は、南阿蘇の我が家に何度も遊びに来てくれた。ヴィアリーは私たちを日本の「家族」と思ってくれた。私たち夫婦をパパ、ママと呼び、娘や息子を妹、弟のように可愛がってくれた。

大学を卒業した彼は、数年間あしなが育英会のスタッフとして日本の事務局で働いた。その後ウガンダに帰国し、日本への留学を希望する後輩たちの橋渡しのような仕事をした。

3年前に「カンパラ(ウガンダの首都)でツアーコーディネーターの会社をやることにした」と連絡が入った。

それに続けて、「パパに報告することがあるので今度日本に来たときに熊本に行きます。会えますか」とある。

久しぶりに会ったアフリカの“息子”は少し中年になっていた。「パパ、僕もうすぐ結婚します。」嗚呼！息子よ、おめでとう。

お相手は日本の「あしなが」で働いていた時に自分が採用面接をしたスペイン女性だそうな。

あれから2年が経ち、現在ヴィアリー夫妻には可愛い娘が誕生した。

来年定年を迎える区切りとして、ウガンダに行くことにした。ウガンダへの直行便は無く、ドバイで乗り換えるらしい。入国には黄熱病のワクチン接種が義務付けられている。黄熱病！ワクチンは最寄りの検疫所に申し込むらしい。何もかもが未知の体験になりそうだ。ヴィアリーや日本で暮らしているダニエルに相談しながら旅の計画を立ていこう。

院長　拝

熊リハ地域連携連絡会に参加して

事務長　緒方　明宏

令和6年8月3日にホテル日航熊本で開催された「熊本リハビリテーション病院 地域連携連絡会」に出席しました。

南郷谷リハに異動して2回目の参加となり、コロナが5類感染症移行後初めてでしたので、ようやく安心感の中参加出来ました。

下肢救済センターでの取り組みや補助療法(高気圧酸素療法や血液浄化療法等)、リハビリの内容の説明もあり“Ｔｅａｍ熊リハ”のレベルの高さを再認識する事が出来ました。懇親会ではいつも以上に法人内外の方々とも親睦が図れ、やはり相手の空気感や雰囲気を感じられる直接の人と人との交流が大切だと実感しました。

満面の笑みを浮かべる渡邉院長

風鎮祭の思い出

事務長　緒方　明宏

風薫る故郷、阿蘇郡高森町が誇る夏の風物詩「風鎮祭(ふうちんさい)」が令和6年8月16日と17日に開催されました。

〝風を鎮め〟台風から農作物を守り五穀豊穣を高森阿蘇神社に祈願する、約250年の歴史を持つ祭り。「肥後の三馬鹿騒ぎ」のひとつに数えられています。町内5つの地区(昭和・旭通り・下町・上町・横町)の町民が参加する出し物のメインは、茶碗やタワシなど日用雑貨を利用した造り物が町内を練り歩く「山引き」と漫才のような掛け合いが面白い国選択無形民俗文化財の「高森にわか」が移動舞台で披露されます。総踊りや地元の子供達による演奏、花火大会も行われました。

◇　◇　◇　◇

さて、風鎮祭の説明は、このぐらいにして私の“風鎮祭の思い出”をお話しします。

最初に参加したのは、「子供手踊り」。参加費が貰えましたので、友達数人と毎年参加し、その参加費を片手にくじ引きやたい焼きなどを買うのが楽しみでした。この手踊りは、町内数十か所で披露し、その当時、南郷谷整形外科医院の中庭で入院患者様相手に昭和向上会の方々と手踊りを披露していたのを覚えています。

移動舞台での高森にわか

小6で初めて“子供にわか”をさせてもらいました。夜遅くまで町中を練り歩き、少し大人になった感覚になったのを懐かしく思い出します。確かその時のお題は「くだもの屋」、オチは、果物の名前が分からず、ウロウロとさまよっている途中でそれを川に落としてしまう。その時に連れが気づき、こう言う。

「分からんなら、よーと聞いいとけ。あの果物は、川に落ちたから“ザボン”じゃないかー。」…これでもご愛敬でお花(お金)が飛んできました。

大学生の時には、熊本市内に住んでいましたので、風鎮祭の前に帰省して、公民館でにわかの練習を遅くまでして市内に帰ってました。

その中でも一番の思い出は、兄弟3人でにわかをした事。いまだに鮮明に記憶が蘇ってきます。とにかくお酒を飲んでいても恥ずかしかった…。横を見ると兄が2人とも真っ白な下地の顔に口紅や髭を書き、汚い衣装でワーワー言っている…。素だとあんまり会話もない3人が…、揺れる移動舞台の上で…。その時のオチはこのような内容でした。

『弟達は、兄貴に船乗りになりたいと相談する。しかし兄貴はどうしても船には乗せたくない。それでも粘る弟達。そこで兄貴は…

「分からんなら、よーと聞いとけ。お前達にはどぎゃんしたっちゃ船に乗せる訳に行かん。お前達には航海(後悔)させたくない。」』。

10分程度のにわかでしたが、一生忘れる事のない時間となりました。

◇　◇　◇　◇

あれから30年余りが経過し、今年の9月で3人とも50歳代。親父が亡くなって34年、56歳の旅立ちでした。

お盆には墓参りに行きましたが、あの時兄弟3人のにわかを見ていたら喜んでくれたのか、焼酎を飲んで酔狂を回していたのか、得意のダンスを披露していたのか、カラオケで十八番の“長崎の鐘”を唄っていたのか…。

風鎮祭が終わりを告げ、ようやく高森町にも秋の足音が聞こえてきました。

阿蘇高森温泉郷からの景色

南郷谷リハビリテーションクリニック

Tel：0967（62）3351

〒869-1602

熊本県阿蘇郡高森町高森2186－1　高森役場向かい

http:// kumareha.net//nangoudani/